昭和二十九年十二月二十日　初版印刷
昭和二十九年十二月二十五日　初版發行

昭和文學全集 51
島崎藤村集

著作者　島崎藤村
發行者　角川源義
印刷者　小田茂作
東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
電話九段〇一二一—〇一二四

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロス工業株式會社
整版所　曉印刷株式會社
印刷所　東日本印刷株式會社
製本所　荒木製本所

Printed in Japan

島崎藤村集

昭和文學全集

角川書店版

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

卷頭寫眞　九
筆蹟　三
嵐　三
伸び支度　三六
分配　四七
貧しい理學士　六五
ある女の生涯　八六
三人　一〇一
明日　一一三
熱海土產　一二七
市井にありて　一九八
桃の雫　二六〇
巡禮
解說　龜井勝一郎　三九八
年譜　三六三

島崎藤村集

ハツしやとしみやき野よ乱れて熟きとの角なを
日かけもうすく芋枯れて荒れしる野こそうれしけれ
獨をさみしきとか耳を吹く初風び琴ときこゆるかしみ
ふかき至眼をを色蒼き石毛花と見き

島崎芳村

手若き日し思出る旧詩草枕し一節び志るす

嵐

子供等は古い時計のかゝつた茶の間に集まつて、そこにある柱の側へ各自の背丈を比べに行つた。次郎の背の高くなつたのにも驚く。家中で、一番高い。あの兒の頭はもう一寸四分ぐらゐで鴨居にまで屆きさうに見える。毎年の暮に、鄉里の方から年取りに上京して、その時だけ私達と一緒になる太郎よりも、次郎の方が背はずつと高くなつた。

茶の間の柱の側は狹い廊下づたひに、玄關や臺所への通ひ口になつてゐて、そこへ身長を計りに行くものは一人づゝその柱を背にして立たせられた。そんなに背延びしては狡いと言ひ出すものがあり、もつと頭を平にしてなどゝ言ふものがあつて、家中のものがみんなで大騒ぎしながら、誰が何分延びたといふしるしを鉛筆で柱の上に記しつけて置いた。誰の戯れから始まつたともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、その一つ〳〵には頭文字だけを羅馬字であらはして置くやうな、そんないたづらもしてある。

「誰だい、この線は。」

と聞いて見ると、末子のがあり、下女のお德のがある。いつぞや遠く滿洲の果から家をあげて歸國した親戚の女の兒の背丈までもそこに殘つてゐる。私の娘も大きくなつた。末子の背は太郎と二寸ほどしか違はない。その末子が最早九文の足袋をはいた。

四人ある私の子供の中で、身長の發育にかけては三郎が一番おくれた。一頃の三郎は妹の末子よりも低かつた。日頃、次郎蟲屆の下女は、何かにつけて「次郎ちやん、次郎ちやん」で、そんな背の低いことでも三郎をからかふと、その度に三郎は口惜しがつて、

「悲觀しちまふなあ——背はもうあきらめた。」

とよく嘆息した。その三郎がめき〳〵と延びて來た時は、いつの間にか妹を追ひ越してしまつたばかりでなく、兄の太郎よりも高くなつた。三郎はうれしさのあまり、手を振つて茶の間の柱の側を歩き廻つたくらゐだ。さういふ私が同じ場所に行つて立つて見ると、殆んど太郎と同じほどの高さだ。私は春先の筍のやうな勢ひでずんずん成長して來た次郎や、三郎や、それから末子をよく見て、時にはこれが自分の子供かと心に驚くことさへもある。

私達親子のものは、遠からず今の住居を見捨てようとしてゐる時であつた。こんなにみんな大きくなつて、めい〳〵一部屋づゝを要求するほど一人前に近い心持を抱くやうになつて見ると、何かにつけて今の住居は狹苦しかつた。私は二階の二部屋を次郎と三郎にあてがひ（この兄弟は二人ともある洋畫研究所の研究生であつたから）末子は階下にある茶の間の片隅で我慢させ、自分は玄關側の四疊半に籠つて、そこを書齋とも應接間とも寢部屋ともして來た。今一部屋もあつたらと、私達は言ひ暮して來た。それに、二階は明るいやうでも西日が强く照りつけて、夏なぞは耐へがたい。南と北とを小高い石垣に塞がれた位置にある今の住居では濕氣の多い窪地にでも住んでゐるやうで、雨でも來る日には茶の間の障子は殊に暗かつた。

「こゝの家には飽きちやつた。」

と言ひ出すのは三郎だ。

「父さん、僕と三ちやんと二人で行つて探して來るよ。好い家があつたら、父さんは見においで。」

次郎は次郎でこんな風に引受け顏に言つて、畫作の暇さへあれば一人でも借家を探しに出掛けた。

今更のやうに、私は住み慣れた家の周圍を見廻した。こゝは一番近いポストへちよつと葉書を入れに行くにも二町はある。煙草屋へ二町、湯屋へ三町、行きつけの床屋へも五六町はあつて、どこへ用達に出掛けるにも坂を上つたり下つたりしなければならない。慣れて見れば、よくそれでも不便とも思はずに暮して來たやうなものだ。離れて行かうとするに惜しいほどの周圍でもなかつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

く思ふやうになつたのであるが、その底には、何かしら自分でも動かずにゐられない心の要求に迫られてゐた。七年住んで見れば澤山だ。そんな氣持から、兎角心も落ちつかなかつた。

ある日も私は次郎と連立つて、麻布笄町から高樹町あたりをさん〳〵探し廻つた揚句、住み心地の好ささうな借家も見當らず仕舞ひに、空しく植木坂の方へ歸つて行つた。いつでもあの坂の上に近いところへ出ると、そこに自分等の家路が見えて來る。誰かしら見知つた顏にも逢ふ。暮から道路工事の始まつてゐた電車通りも石やアスフアルトにすつかり敷きかへられて、橡の並木のすがたも何となく見直す時だ。私は次郎と二人でその新しい歩道を踏んで、鮨屋の店の前あたりからある病院のトタン塀に添うて歩いて行つた。植木坂は勾配の急な、狹い坂だ。その坂の降り口に見える古い病院の窓、そこにある煉瓦塀、そこにある蔦の蔓、すべて身にしみるやうに思はれて來た。

下女のお德は家の方に私達を待つてゐた。私達が坂の下の石段を降りるのを跫音で聽き知るほど、最早三年近くもお德は私の家に奉公してゐた。主婦といふものゝない私の家では、子供等の着物の世話まで下女に任せてある。このお德は臺所の方から肥つた笑顏を見しい口をきいた。

「次郎ちやん、好い家があつて？」

「駄目。」

次郎はがつかりしたやうに答へて、玄關の壁の上へ鳥打帽をかけた。私も冬の外套を脱いで置いて、借家探しに草臥れた眼を自分の部屋の障子の外に移した。僅かばかりの庭も霜枯れて見えるほど、まだ春も淺かつた。

私が早く自分の配偶者を失ひ、六歳を頭に四人の幼いものをひかへるやうになつた時から、既にこんな生活は始まつたのである。私はいろ〳〵な人の手に子供等を託して見、いろいろな場所にも置いて見たが、結局父としての自分が進んで面倒を見るより外に、母親のない子供等をどうすることも出來ないのを見出した。不自由な男の手一つでも、どうにか吾が兒の養へないことはあるまい、その決心に到つたのは私が遠い外國の旅から自分の子供の側に歸つて來た時であつた。その頃の太郎は漸く小學の課程を終りかける程で、次郎はまだ腕白盛りの少年であつた。私は愛宕下のある宿屋にゐた。二部屋あるその宿屋の離れ座敷を借り切つて、太郎と次郎の二人だけをそこから學校へ通はせた。食事の度には宿の女中がチヤブ臺などを提げながら、母屋の臺所の方から長い廊下づたひに、私達の部屋まで支度をしに來て呉れた。そこは地方から上京する馴染の客をおもに相手としてゐる多い中に、子供を連れながら宿屋住居する私のやうなものもめづらしいと言はれた。

外國の旅の經驗から、私も簡單な下宿生活に慣れて來た。それを私は愛宕下の宿屋に應用したのだ。自分の身のまはりのことは成るべく人手を借りずに。そればかりでなく、子供にあてがふ菓子も自分で町へ買ひに出たし、子供の着物も自分で疊んだ。

この私達には、いつの間にか、いろ〳〵な隱し言葉も出來た。

「あゝ、また太郎さんが泣いちやつた。」

私はよくそれを言つた。少年の時分には有りがちなことながら、兎角兄の方は「泣き」易かつたから、夜中に一度づゝは自分で眼をさまして、そこに眠つてゐる太郎を呼び起した。子供の「泣いたもの」の始末にも人知れず心を苦めた。そんなことで顏を紅めさせるでもあるまいと思つたから。

次第に、私は子供の世界に親しむやうになつた。よく見ればそこにも流行といふものがあつて、石蹴り、めんこ、劍玉、べい獨樂といふ風に、あるものは流行りあるものは廢れ、子供の喜ぶ玩具の類までが時につれて移り變りつゝある。私は又、二人の子供の性質の相違をも考へるやうになつた。正直で、根氣よくて、眼をパチクリさせるやうな癖のあるところまで、何となく太郎は義理ある祖父さんに似て來た。それに比べると次郎は、私の甥

を思ひ出させるやうな人懷こいところと氣象の鋭さとがあつた。この弟の方の子供は、宿屋の亭主でも誰でも遣りこめるほどの理窟屋だつた。

盆が來て、みそ萩や酸漿で精靈棚を飾る頃には、私は子供等の母親の位牌を旅の鞄の中から取出した。宿屋住居する私達も門口に出て、宿の人達と一緒に麻幹を焚いた。私達は順に迎へ火の消えた跡をまたいだ。すると、次郎はみんなの見てゐる前で、

「どれ、三ちやんや末ちやんの分をもまたいで——」

と言つて、二度も三度も燒け殘つた麻幹の上を飛んだ。

「あゝいふところは、どうしても次郎ちやんだ。」

と宿屋の亭主は快活に笑つた。

やゝもすれば兄を凌がうとするこの弟の子供を制へて、何を言はれても默つて順つてゐるやうな太郎の性質を延ばして行くといふことに、絶えず私は心を勞しつゞけた。その心づかひは、子供から眼を離させなかつた。町の空で、子供の泣き聲や喧嘩する聲でも聞きつけると、私はすぐに座を起つた。離れ座敷の廊下に出て見た。それが自分の子供の聲でないことを知る迄は安心しなかつた。

私のところへは來客も多かつた。ある酒好きな友達が、この私を見に來た後で、「久し振りで何處かへ誘はうと思つたが、あゝして子供をひかへてゐるところを見ると、どうしてもそれが言ひ出せなかつた。」と人に語つたといふ。その話を私は他の友達の口から聞いた。でも、私も、引込んでばかりはゐられなかつた。世間に出て友達仲間に交りたいやうな夕方でも來ると、私は太郎と次郎の二人を引連れて、いつでも腰巾着づきで出掛けた。

そのうちに、私は末子をもその宿屋に迎へるやうになつた。私は額に汗する思ひで、末子を迎へた。

「二人育てるも、三人育てるも、世話する身には同じことだ。」

と私も考へ直した。長いこと親戚の方に預けてあつた娘が學齡に達するほど成人して、また親の懷に歸つて來たといふことは、私に取つての新しい歡びでもあつた。その頃の末子はまだ人に髪を結つて貰つて、お手玉や千代紙に餘念もないほどの小娘であつた。宿屋の庭のまゝごとに、松葉を魚の形につなぐことなぞは、殊にその幼い心を樂ませた。兄達の學校も近かつたから、海老茶色の小娘らしい袴に學校用の鞄で、末子をもその宿屋から通はせた。にはかに夕立でも來さうな空の日には、私は娘の雨傘を小脇にかゝへて、それを學校まで屆けに行くことを忘れなかつた。

私達親子のものは、足掛二年ばかりの宿屋住居の後で、そこを引揚げることにした。愛宕下から今の住居のあるところまでは、歩いてもさう遠くない。電車の線路に添うて長い榎坂を越せば、やがて植木坂の上に出られる。私達は宿屋の離れ座敷にあつた古い本箱や机や簞笥なぞを荷車に載せ、相前後して今の住居に引移つて來たのである。

今の住所へは私も多くの望みをかけて移つて來た。婆やを一人雇ひ入れることにしたのもその時だ。太郎は既に中學の制服を着る年頃であつたから、すこし遠くても電車で私の母校の方へ通はせ、次郎と末子の二人を愛宕下の學校まで毎日歩いて通はせた。その頃の私は二階の部屋に陣取つて、階下を子供等と婆やにあてがつた。

しばらくするうちに、私は二階の障子の側で自分の机の前に坐りながらでも、階下に起るいろ〳〵な物音や、話聲や、客のおとづれや、子供等の笑ふ聲までを手に取るやうに知るやうになつた。それもその筈だ。餌を拾ふ雄鷄の役目と、羽翅をひろげて雛を隱す母鷄の役目とを兼ねなければならなかつたやうな私であつたから。

どうかすると、末子の啜り泣く聲が階下から傳はつて來る。それを聞きつける度に、私はしかけた仕事を捨てゝ、梯子段を驅け降りるやうに二階から降りて行つた。

私は直ぐ茶の間の光景を讀んだ。いきなり簞笥の前へ行つて、次郎と末子の間に入つた。太郎は、と見ると、そこに爭つてゐる弟や妹をなだめようでもなく、たゞ途方に暮れてゐ

る。婆やまでそこいらにまご〳〵してゐる。
私は何も知らなかつた。末子が何をしたのか、どうして次郎がそんなにまで平素の機嫌をそこねてゐるのか、さつぱり分らなかつた。たゞたゞ私は、まだ兄達二人との馴染も薄く、こゝろぼそく、兎角里心を起しやすくしてゐる新參者の末子がそこに泣いてゐるのを見た。
次郎は妹の方を鋭く見た。そして言つた。
「女のくせに、威張つてゐやがらあ。」
この次郎の怒氣を帶びた調子が、はげしく私の胸を打つた。
兄とは言つても、その頃の次郎は漸く十三歳ぐらゐの子供だつた。日頃感じ易く、涙もろく、それだけ激し易い次郎は、私の蔭に隱れて泣いてゐる妹を見ると、さもいま〳〵しさうに、
「父さんが來たと思つて、好い氣になつて泣くない。」
「喧嘩は止せ。末ちやんを打つなら、さあ父さんを打て。」
と私は簞笥の前に立つて、やゝもすれば妹をめがけて打ちかゝらうとする次郎を遮つた。私は身をもつて末子を庇護ふやうにした。
「父さんが見てゐないと直ぐこれだ。」とまた私は次郎に言つた。「どうしてさう解らないんだらうなあ。末ちやんはお前達とは違ふぢやないか。他から父さんの家へ歸つて來た人ぢやないか。」
「末ちやんのお蔭で、僕が父さんに叱られる。」
その時、次郎は子供らしい大聲を揚げて泣き出してしまつた。
私は家の内を見廻した。丁度町では米騷動以來の不思議な沈默がしばらくあたりを支配した後であつた。市内電車從業員の罷業の噂も傳はつて來る頃だ。植木坂の上を通る電車も稀だつた。たまに通る電車は町の空に悲壯な音を立てゝ、窪い谷の下にあるやうな私の家の四疊半の窓まで物凄く響けて來てゐた。
「家の内も、外も、嵐だ。」
と私は自分に言つた。
私が二階の部屋を太郎や次郎にあてがひ、自分は階下へ降りて來て、玄關側の四疊半に坐るやうになつたのも、その時からであつた。そのうちに、私は三郎をも今の住居の方に迎へるやうになつた。私は獨りで手を揉みながら、三郎をも迎へた。
「三人育てるも、四人育てるも、世話する身には同じことだ。」
と末子を迎へた時と同じやうなことを言つた。それからの私は、茶の間にゐる末子のよく見えるやうなところで、二階の梯子段を昇つたり降りたりする太郎や次郎や三郎の跫音もよく聞えるやうなところで、ずつと坐り續けてしまつた。
こんな世話も子供だから出來た。私は足掛五年近くも奉公してゐた婆やにも、それから今のお德にも、串談半分によくさう言つて聞かせた。もしこれが年寄りの世話であつたら、いつまでも一つ事を氣に掛けるやうな年老いた人達を奈何してこんなに養へるものではないと。
私達がしきりに探した借家も容易に見當らなかつた。好ましい住居もすくないものだつた。三月の節句も近づいた頃に、また私は次郎を連れて一軒別の借家を見に行つて來た。そこは次郎と三郎とで精しい見取圖まで取つて來た家で、二人ともひどく氣に入つたと言つてゐた。青山五丁目まで電車で、それから數町ばかり歩いて行つたところを左へ折れ曲つたやうな位置にあつた。部屋の數が九つもあつて、七十五圓なら貸す。それでも家賃が高過ぎると思ふなら、今少しは引いてもいゝと言はれるほど長く空屋になつてゐた古い家で、造作もよく、古風な中二階など殊におもしろく出來てゐたが、部屋が多過ぎて未だに借手がないとのこと。よつぽど私も心が動いて歸つて來たが、一晩寢て考へた上に、自分の住居には過ぎたものとあきらめた。
適當な借家の見當り次第に移つて行かうとしてゐた私の家では、障子も破れたまゝ、かまはずに置いてあつた。それが氣になるほど眼について來た。せめて私は毎日眺め暮す身のまはりだけでも繕ひたいと思つて、障子の

立つた。
「父さん、障子なんか張るのかい。」
次郎はしばらくそこに立つて、私のすることを見てゐた。
「引越して行く家の障子なんか、どうでもいいのに。」
「だつて、七年も雨露を凌いで來た屋根の下ぢやないか。」
と私は言つて見せた。
煤けた障子の膏藥張りを續けながら、私は更に言葉をつゞけて、
「ホラ、この前に見て來た家サ。あそこはまるで主人公本位に出來た家だね。主人公さへ好ければ、他のものなぞはどうでも好いといふ家だ。唯、主人公の部屋だけが立派だ。ああいふ家を借りて住む人もあるかなあ。そこへ行くと、二度目に見て來た借家の方がどのくらゐ好いか知れないよ。いかに言つても、父さんの家には大き過ぎるね。」
「僕も最初見つけた時に、大き過ぎるとは思つたが——」
この次郎は私の話を聞いてゐるのかと思つたら、何かもぢ〳〵してゐた後で、私の前に手をひろげて見せた。
「父さん、月給は？」
この「月給」が私を笑はせた。毎月、私は三人の子供に「月給」を拂ふことにしてゐた。月の初と半ばとの二度に分けて、半月に一圓ゐた。
「今月はまだ出さなかつたかねえ。」
「父さん、けふは二日だよ。三月の二日だよ。」
それを聞いて、私は黑いメリンスを卷きつけた兵兒帶の間から蝦蟇口を取出した。その中にあつた金を次郎に分け、丁度そこへ屋外からテニスの運動具をさげて歸つて來た三郎にも分けた。
「へえ、末ちやんにも月給。」
と私は言つて、茶の間の廊下の外で古い風琴を靜かに鳴らしてゐる娘のところへも分けに行つた。その時、銀貨二つを風琴の上に載せた戻りがけに、私は次郎や三郎の方を見て、半分冗談の調子で、
「天麩羅の立食なんか、ごめんだぜ。」
「父さん、そんな立食なんかするものか。そこは心得てゐるから安心してお出よ。」と次郎は言つた。
樂しい桃の節句の季節は來る、月給にはありつく、やがて新しい住居での新しい生活も始められる、その一日は子供等の心を浮き立たせた。末子も大きくなつて、もう雛いぢりでもあるまいといふところから、茶の間の床には古い小さな雛と五人囃子なぞをしるしばかりに飾つてあつた。それも子供等の母親がまだ達者な時代からの形見として殘つたものばかりだつた。私が自分の部屋に戻つて障子のさかんな笑ひ聲が起つた。お德の賑かな笑ひ聲もその中に混つて聞えた。
見ると、次郎は雛壇の前あたりで、大騒ぎを始めた。暮の築地小劇場で「子供の日」のあつた折に、たしか「そら豆の煮えるまで」に出て來る役者から見て來たらしい身振り、手眞似が始まつた。次郎はしきりに調子に乘つて、手を左右に振りながら茶の間を踊つて歩いた。
「オイ、父さんが見てるよ。」
と言つて、三郎はそこへ笑ひころげた。
私達の心は既に半分今の住居を去つてゐた。
私は茶の間に集まる子供等から離れて、獨りで自分の部屋を歩いて見た。僅かばかりの庭を前にした南向きの障子からは、家中で一番靜かな光線が射して來てゐる。東は窓だ。二枚の硝子戸越しに、隣りの大屋さんの高い塀と樫の樹とがこちらを見おろすやうに立つてゐる。その窓の下には、地下室にでもゐるやうな靜かさがある。
丁度三年ばかり前に、五十日あまりも私の寢床が敷きづめに敷いてあつたのも、この四疊半の窓の下だ。思ひがけない病が五十の坂を越した頃の身に起つて來た。私はどつと床についた。その時の私は再び起つことも出來まいかと人に心配された程で、茶の間に集ま

る子供等まで一時沈まり返つてしまつた。
どうかすると、子供等のすることは、病んでゐる私をいら〳〵させた。
「父さんを怨らせることが、父さんの身體には一番惡いんだぜ。それくらゐのことがお前達に解らないのか。」
それを私が寢ながら言つて見せると、次郎や三郎は頭をかいて、すご〳〵と障子のかげの方へ隱れて行つたこともある。
それからの私はこの部屋に臥たり起きたりして暮した。めづらしく氣分の好い日が來た後には、また疲れ易く、眩暈心地のするやうな日が續いた。毎朝の氣分がその日その日の健康を豫報する晴雨計だつた。私の健康も確實に恢復する方に向つて行つたが、いかに言つてもそれが遲緩で、もどかしい思ひをさせた。何程の用心深さで私は折々の暗礁を乘り越えようと努めて來たか知れない。この病弱な私が、兎も角も住居を移さうと思ひ立つまでに漕ぎつけた。私は何か斯う眼に見えないものが群がり起つて來るやうな心持で、本棚がはりに自分の藏書のしまつてある四疊半の押入をもあけて見た。いよ〳〵この家を去らうと心をきめてからは、押入の中なぞも、まるで物置のやうになつてゐた。世界を家とする巡禮者のやうな心であちこちと提げ廻つた古い鞄——その外國の旅の形見が、まだそこに殘つてゐた。
「子供でも大きくなつたら。」

私はそればかりを願つて來たやうなものだ。あの愛宕下の宿屋の方で、太郎と次郎の二人だけを側に置いた頃は、まだそれでも自由がきいた。腰巾着附きでも何でも自分の行きたいところへ出掛けられた。末子を引取り、三郎を引取りするうちに、眼には見えなくても降り積る雪のやうな重いものが、次第に深くこの私を埋めた。

しかし私は獨りで子供を養つて見てゐるうちに、だん〳〵小さなものゝ方へ心をひかれるやうになつて行つた。年若い時分には私も子供なぞはどうでもいゝと考へた。反つて手足纏ひだぐらゐに考へたこともあつた。知る人もすくない遠い異鄕の旅なぞをして見、歸國後は子供の側に暮して見、次第に子供の世界に親しむやうになつて見ると、以前に足手纏ひのやうに思つたその自分の考へ方を改めるやうになつた。世はさびしく、時は難い。明日は、明日はと待ち暮して見ても、いつまで待つてもそんな明日がやつて來さうもない。眼前に見る事柄から起つて來る多くの失望と幻滅の感じとは、いつでも私の心を子供に向けさせた。
さうは言つても、私が自分の直ぐ側にゐるものゝ友達になれた譯ではない。私は今の住居に移つてから、三年も子供の大きくなるのを待つた。その頃は太郎もまだ中學へ通ひ、婆やも家に奉公してゐた。釣だ遠足だと言つて日曜毎に次郎もぢつとしてゐなかつた時代だ。一體、次郎はおもしろい子供で、一人で家の內を賑かしてゐた。夕飯後の茶の間に家のものが集まつて、電燈の下で話し込む時が來ると、弟や妹の聞きたがる怪談なぞを始めて、夜の更けるのも知らずに、皆を恐がらせたり樂ませたりするのも次郎だ。そのかはり、いたづらも烈しい。私がよく次郎を叱つたのは、この兒をたしなめようと思つたばかりでなく、一つには婆やと子供等の間を調節したいと思つたからで。太郎贔屓の婆やは、何かにつけて「太郎さん、太郎さん」で、それが次郎をいら〳〵させた。
この次郎がいつになく顏色を變へて、私のところへやつて來たことがある。
「我儘だ、我儘だつて、どこが、我儘だ。」
見ると次郎は顏色も靑ざめ、少年らしい怒りに震へてゐる。何がそんなにこの兒を憤らせたのか、よく思ひ出せない。しかし、私も默つてはゐられなかつたから、
「お前の暴れ者は研究所でも評判だといふぢやないか。」
「誰が言つた——」
「彌生町の奧さんがいらしつた時に、なんでもそんな話だつたぜ。」
「知りもしないくせに——」
次郎が私に向つて、こんな風に强く出たことは、後にも先にもない。急に私は自分を反省する氣にもなつたし、言葉の上の爭ひにな

ってもつまらないと思つて、それぎり口をつぐんでしまつた。

次郎がぷいと表へ出て行つた後で、太郎は二階の梯子段を降りて來た。その時、私は太郎をつかまへて、

「お前はあんまり溫順過ぎるんだ。お前が一番の兄さんぢやないか。次郎ちやんに言つて聞かせるのも、お前の役ぢやないか。」

太郎はこの側杖を喰ふと、持前のやうに口を尖らしたぎり、物も言はないで引き下つてしまつた。さういふ場合に、私のところへ來て太郎を辯護するのは、いつでも婆やだつた。

しかし、私は子供を叱つて置いては、いつでも後で悔いた。自分ながら、自分の聲とも思へないやうな聲の出るに呆れた。私は獨りで唇を嚙んで、仕事もろく〳〵手につかない。片親の悲しさには、私は子供を叱る父であるばかりでなく、そこへ提げに出る母をも兼ねなければならなかつた。丁度三時の菓子でも出す時が來ると、一人で二役を兼ねる俳優のやうに、私は母の方に早替りして、茶の間の火鉢の側へ盆を並べた。次郎の好きな水菓子なぞを載せて出した。

「さあ、次郎ちやんもおあがり。」

すると、次郎はしぶ〳〵それを食つて、やがて機嫌を直すのであつた。

私の四人の子供の中で、三郎は太郎と三つちがひ、次郎とは一つちがひの兄弟にあたる。三郎は次郎の暴れ屋ともちがひ、また別の意味で、よく私の方へ突きかゝつて來た。何をこしらへて食はせ、何を買つて來てあてがつても、この兒はまだ物足りないやうな顏ばかりを見せた。私の姉の家の方から歸つて來たこの兒は、容易に胸を開かうとしなかつたのである。上に二人も兄があつて絶えず頭を押へられることも、三郎を不平にしたらしい。それに、次郎贔屓のお德が婆やに替つて私の家へ奉公に來るやうになつてからは、今度は三郎が納まらない。丁度婆やの太郎贔屓で、兎角次郎が納まらなかつたやうに。

「三ちやん、人を抓つちやいやですよ。ひどいことをするのねえ、この人は。」

「なんだ。なんにもしやしないぢやないか。ちよつと觸つたばかりぢやないか――」

お德と三郎の間には、こんな小ぜり合ひが絶えなかつた。

「父さんはお前達を惡くするつもりでゐるんぢやないよ。お前達を好くするつもりで育てゐるんだよ。母さんでも生きてゝ御覽、どうして言ふことをきかないやうな子供は、よつぽどひどい目に逢ふんだぜ――あの母さんは氣が短かゝつたからね。」

それを私は子供等に言ひ聞かせた。あまり三郎が他人行儀なのを見ると、時には私は思ひ切り打ち懲さうと考へたこともあつた。ところが、幼少な時分から自分の側に置いた太郎や次郎を打ち懲すことは出來ても、十年他に預けて置いた三郎に手を下すことは、どうしても出來なかつた。ある日、私は自分の忿りを制へきれないことがあつて、今の住居の玄關のところで、思はずそこへやつて來た三郎を打つた。不思議にも、その日からの三郎は反つて私に馴染むやうになつて來た。その時も私は自分の手荒な仕打ちを後で悔いはしたが。

「十年他へ行つてゐたものは、父さんの家へ歸つて來るまでに、どうしたつてまた十年はかゝる。」

私はそれを家のものに言つて見せて、よく嘆息した。

私達が住慣れた家の二階は東北が廊下になつてゐる。窓が二つある。その一つからは、小高い石垣と板塀とを境に、北隣の家の茶の間の白い小障子まで見える。三郎はよくその窓へ行つた。遠い鄕里の方の木曾川の音や少年時代の友達のことなぞを思ひ出し顏に、その窓のところでしきりに鶯の啼聲の眞似を試みた。

「うまいもんだなあ。とても鶯の名人だ。」

三郎は階下の臺所に來て、そこに働いてゐるお德にまで自慢して聞かせた。

ある日、この三郎が私のところへ來て言つた。

「父さん、僕の鶯を聽いた？　僕がホウ、ホケキョとやると、隣の家の方でもホウ、ホケキョとやる。僕は隣の家に鶯が飼つてあるの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com